

わたしたちの声、わたしたちの想い

ブラック/ブラックミックスの若者からのメッセージ

Our Voices, Our Stories

Message from Black/Black mixed-race youth

アフリカンユースミートアップ運営メンバー

エバデ・ダン 愛琳、馬場口 佳乃、三浦 アーク

Evbade-dan Irene, Babaguchi Kano, Miura Ark

オンラインイベントでの新たな展開

2020年度上半期は、アフリカンユースミートアップ、そして、アフリカンキッズクラブ/アフリカンキッズクラブ東海がとても成長できたと感じています。アフリカンユースミートアップでは、新型コロナウイルス感染症拡大により、3月に予定していた「ヘア×わたしたち」のイベントをオンライン (Zoom) に変更して開催しました。それを機に、オンラインで10回のイベント (4月~8月) を行ってきました。

まず、4月に学校の休校など多くのユースが自粛している中で始めたのが、トークシリーズ 'African Youth Meetup - LIVE!' です。このイベントは4回開催し、2時間半にわたって、学校や黒人女性であること、アートなど幅広いトピックについて、ゲストスピーカーや参加者と話しました。特にうれしかったことは、①オンラインで行うことで全国各地、海外まで、様々な場所に暮らす人たちが参加できたこと、②私たちが重視している「中高生」の参加者が増えたことです。

BLM 渦中でのケアセッション

そして、5月下旬からは、アフリカンユースミートアップにとって大変重要な時になりました。米国で起こった複数のアフリカ系アメリカ人が警察官に不当に殺害された事件を機に 'Black Lives Matter (BLM)' が世

界的なムーブメントとなり、日本でも大きく報道されました。キッズやユースが普段目にする SNS でも、ハッシュタグをつけ、動画がどんどんシェアされました。東京や大阪では、BLM を周知すること、そしてアフリカ系アメリカ人の人々との連帯を示すことなどを目的とした平和的行進が行われました。これらは多数のメディアが注目し、BLM について目にしない日はない、といった日々が続きました。

ムーブメントに火がつく要因となった事件は、今回が初めてではなく、米国では、毎年200人以上のアフリカ系アメリカ人が警察官の暴力で死亡しています。でも、私たちが物心ついてからずっと向き合ってきた人種差別の問題に、たくさんの日本社会で暮らす人々が気づき、意見を述べ、また意見を求められたことは、初めてでした。また、被害者が殺害される様子を捉えた動画や記事をここまで頻繁に目にすることも、初めてでした。警察官に首をひざで押さえ込まれて殺害されたフロイド (George Floyd) さんがどうしても自分の父や親族と重なり、耐えがたい屈辱と、それ以上の恐怖心と怒りで、食事をするのも夜眠るのも困難なつらい日々が続きました。同時に、アフリカンキッズクラブやアフリカンユースミートアップにいつも参加してくれるキッズやユースのことがとても心配になりました。しかし、自分自身が不安定な状態では何もできず、いらだち、自身を責めることもありました。

数えきれないほど「気にしすぎだよ」と言われ、「日

えばで・だん あいりーん：AJF 理事。2015年からアフリカンキッズクラブの活動に携わり、2019年より地元東海でも活動を開始。アフリカンユースミートアップの運営にも携わっている。

ばばぐちかの：鹿児島県生まれ。都内の大学3年生でアフリカ地域を専攻。2019年4月より AJF インターンとして活動し、アフリカンキッズクラブ、アフリカンユースミートアップの運営に携わる。

みうらあーく：高校2年生。2019年7月からアフリカンユースミートアップを始める。Instagram (@jeunnedark) で作詞作曲した曲やショートフィルムを載せている。

本には人種差別はない」と言い切る人々、「今こそ経験を話してみんなに問題を知ってもらわなければならない」と強要してくる人々もいました。結局、私たちを個人としてはみてくれず、だれも私たちの心のケアをしてくれませんでした。まるで日本社会のなかで、私たちの存在を否定するか、我慢を強要するか、大衆が問題意識を持つための教材にするかを、私たち抜きで決められているようでした。

そういう状況の中で、私たちに何ができるか話し合いを重ね、ケアセッションを開催することにしました。このケアセッションは、ブラック／ブラックルーツの子ども／若者限定で開催しました。なぜなら、今回の出来事による心の傷を、親しい友人や家族にさえ話せなかったからです。人種差別の経験について話すとき、往々にして前置きがとても長くなります。説明しても「考えすぎだ」と何度も言われてきて、人に話すのさえおっくうになっていました。だから一人で解決しようとしたのですが、もちろん、それは無理でした。また、話を聞いてくれる両親にさえも、心配をかけたくないと思い、相談できませんでした。他のユースも、そう感じている人が多いとわかり、前置きは一切抜きで分かり合えるよう、ブラック／ブラックミックスの子ども／若者に限定にしたのです。

6月14日に「ブラック／ブラックミックスの子ども／若者のためのケアセッション」をオンラインで開催し、小学生から20代まで20名ほどが参加しました。企画の段階から運営メンバーは、参加者が安心して自分の感じていることを話せる場を作ることに細心の注意を払いました。一人5分の持ち時間には、話をさえぎることなく、全員が発言者の話に耳を傾けることに徹しました。それぞれが抱えているありのままの想いを共有するという経験は、運営メンバーにとっても新鮮でした。同じブラックルーツの仲間がいるということだけではなく、自分の想いを共有することの持つ影響力を感じてもらえたと思います。一人ひとりの経験や想いは全て等しく価値があり、周りをエンパワメントすることもできるということを再確認させられました。ケアセッションのような試みは、私たちにとって初めてでしたが、今後も開催していきたいと思っています。

わたしたちの声や想いを聴いてほしい

ケアセッションを通じて、仲間存在に支えられ、想いを共有することの大切さを再確認し、私たちの活動の意味を改めて考えました。そして、今までの経験や人種差別について、私たちの声や想いをシェアする公開セッションを開催することにしました。開催する

かどうか悩みましたが、私たちに話すことを強要するのではなく、私たちの声に耳を傾けようとしてくれる人が少なからずいることも開催を後押ししました。

ケアセッションから2週間後の6月28日に、4人のユースをゲストスピーカーに迎え、公開オンラインセッション「わたしたちの声 わたしたちの思い〜ブラック／ブラックミックスの若者からのメッセージ」を開催しました。人種差別についてアフリカにルーツのない日本の人たちと対話ができるようにしたいと思っていましたが、日本社会ではアフリカンルーツの人たちや差別についての理解がまだまだ足りないことを考え、まずは「気づき (awareness)」の機会を作ろうということになりました。ですから、話す人以外は音声ミュートをしてもらい、今まで経験したことや想いに耳を「傾ける」形で行いました。

このセッションのゲストスピーカー4名のユースの発言を紹介します。

————— ソダウ ターラ (Ndao Talla) さん

母が日本人で、父がセネガル人です。現在、大学4年生でプロサッカー選手を目指しています。日本で生まれた後、セネガルに移り、その後小学4年生の冬に北海道に来て、それからずっと日本に住んでいます。日本に来たときは、日本語が全く話せなくてとても大変で、小学校に通いながら日本語クラスにも通ってました。小学校では先生を含めみんなに歓迎されて、日本語の横にフランス語で書いてくれるなど、みんなに優しくしてもらいました。自分は恵まれていましたし、仲の良い友達もできました。

その年に少年団に入りサッカーを始めました。そこで一部の子やその親から、嫌な思いをさせられるようなことが何度もありました。僕はプレーで見返してやるとずっと思っていました。でも試合にも出させてもらえなくて、僕の母がなんで試合に出られないのかを監督に聞いたときに「ターラ君は正直言って見た目が強そうなのに、下手くそすぎます」と言われたそうです。その日の夜、泣いて悔しがる母からその言葉を聞いて、僕はとても悔しくて、もっとうまくなってプロになると強く決意しました。そして、努力を重ねてきました。肌の色が違うからって嫌な思いするのは悔しいし、その悔しい気持ちを忘れずに目標ができたときにそこにぶつけると、人よりがんばれるし、人にも優しくなれます。僕は、ブラックの血が流れていることに誇りを持っています。もっとビッグな大人になって、もっと影響力のある人になって、差別的な考え方を変えていきたいですし、僕たちみたいなハーフがもっと

気楽に生活できるようになるようにがんばっていきたいと思います。必ず結果を出してプロになって、自分が出る試合にアフリカンルーツの子どもたちを招待したいと思っています。

池田彩 (Ikeda Aya) さん

私は、公立の小学校に行きましたが、案の定、自分の肌の色とか髪の毛についてからかわれました。小学1年生の子どもが差別について理解するのは難しいことではあると思います。だから、「なんで肌が黒いの？」みたいな言葉から始まって、だんだんエスカレートしていき、気がつく私の性格はすごく暗くなっていました。転校しても、またいじめの標的になってしまいました。

中学校では、インターナショナルな学校に進み、自分のことを肌の色とかで判断しない人たちが集まっていると思ったので、コミュニケーションを積極的に取ろうと思うようになりました。すると明るい性格になって、自分の肌の色や髪などに誇りを持つことができました。それでもからかわれたりはしました。必ずしも環境が変われば差別がなくなるわけではないです。自分の肌の色や髪を好きになることができたので、気にしないようになれました。だから、傷ついてもそれ以上に誇りに思えば、そんなにつらい思いをしなくてすむのだと気づきました。

私の友だちが言ったことをシェアします。中学校で仲良くなった友だちがある日、「そういえば、彩はハーフだったね、忘れてた」って言いました。その友だちは何気なく口にしました。ハーフと言われると、ハーフというフィルター越しの関係のようで壁を感じていたの、その友だちの言葉は、とてもうれしかったです。

私はミックスだから、このアフリカンユースミートアップを通して友人ができ、今日もゲストスピーカーとしてお話する機会ができました。自分に自信を持つために自らミックスであることを言ったり、自分がミックスであることを好きでいることは大事だと思います。でも、他の人がミックスだからと判断するのは違う気がします。お互いのことを尊重しあって、民族や肌の色、性別で判断しないで、同じ人間という大きな枠で、みんなが接しあえる世界になってほしいと心から願っています。

エリカ (Eryka) さん

私立高校に通っていて、最近、頭髪指導がありました。私は入学の時からお団子ヘアをしていましたが、

先生は黒髪のストレートヘアの子の髪を指さして、この髪型が校則の基準だと言い、注意されました。私の髪はストレートヘアではないと伝えましたが、それは関係がないと言われ、腹が立ちました。すると次の日に同じ先生から、今度は一変して、髪はそのままでもいいと軽く謝られました。信用していた大人に自分の髪のことまでひどく言われたことで、心からいらだちました。

中学生の時には、中学校と家という狭い世界だけで、そこには居場所がありませんでした。自分に自信が持てなくて学校に行くのも嫌で、いなくなりたかったです。周りの環境は大切です。今の高校には、私の髪型がいいね、高身長がかっこいい、と肯定してくれる人がいます。自分を肯定してくれる友だちを自分で選んで、そんな人で周りをいっぱいにして自分に自信をつけるといいです。

BLMをきっかけにして、自分の経験を初めてSNSでシェアしました。これまで、日本生まれ日本育ちで日本の子たちと生きてきました。自分のルーツを否定したいわけではないけど、日本に暮らしてきて黒人の話題はとにかく触れたくないことでした。それでもBLMが広がる中で、言わないと知ってもらえないと自分の考えを改め、手が震えながらも投稿しました。

バスケットボール部なのですが、試合の時に、「黒人なのによくない」とか、「茶色い子にディフェンスついて」など言われたことがあります。体型や肌といった見た目で判断するのではなくて、人の内面を知ってほしいです。同じように、クラスで話さない子がいたら積極的にその人に関わって、その人を知ってほしいです。同じブラックルーツの子どもたちには、いろいろな人を知って、いろいろな人と関わって、自分を認めて、自分に正直に生きてほしいと思います。

マリア (Maria) さん

エチオピアと日本にルーツを持ち、大阪で生まれ育ちました。BLMをきっかけにしてSNSで自身の経験をシェアしたところ、たくさんの人が見てくれました。びっくりしたのは、「日本に人種差別があったなんて知らなかった」という感想が多く寄せられたことでした。声を上げることが大切だと思うと同時に、多くの人が日本にある人種差別をわかっていないということを知りました。

2週間前に渋谷のBLMマーチに参加しました。デモに参加したのは初めてでした。自分がずっと意識してきたことを、大勢の人たちと声をあげられたことは、パワフルでうれしい気持ちになりました。しかし一方

「ブラック／ブラックミックスの子ども／若者のためのケアセッション」(2020年6月14日)のポスター



で、周りの目を気にしている自分に気が付きました。取材に来ているテレビに映って会社の人に気づかれたらどうしようとか、怖いとどこかで思っている自分がいました。参加しているのに、サングラスをして自分の顔を隠すように歩いている自分が情けない気持ちでした。真っ向から対立してくる人よりも、沿道から冷ややかな目線や何も考えずカメラを向ける人の方がよっぽど怖かったです。

また、そんな風にサングラスをかけてマーチに参加した自分は、これまでの自分の生き方を凝縮して映していると思いました。おかしいことをおかしいと言ってきたように自分でも思っていたけれど、本当はそうではなくて、自分の髪のことをいじられて嫌だと思っても、いじめられないように自分でネタを持っていて笑いをとるといったように、本当は嫌なのに、はっきり言わずにいた自分に気が付きました。

SNSでも最近、自分が日常的に感じる、日本に蔓延する潜在的な差別意識に関して発信していますが、声を上げることは本当に簡単なことではないと感じます。批判的な意見よりもそういうことを言ったときに興味を持ってもらえないことが一番つらいです。

黒人のハーフとして、よいことも悪いこともありましたが、ただ、つらい記憶は、他者の弱い気持ちを理解する心を持つことにつながっていると感じます。自分のおかしいと思っていることを声高に言うことを通じて、他の社会的に弱い立場の人に対して関心や問題意識を持つことにもつながりました。声をあげることは怖いことだと思ったけど、様々なことに問題意識をもってみんなで考えていきたいです。

このように、心が動かされるメッセージを4人のスピーカーが話してくれました。スピーカーが話した後

「わたしたちの声 わたしたちの想い〜ブラック／ブラックミックスの若者からのメッセージ」(2020年6月28日)のポスター



には、参加者で日本で育ったブラック／ブラックミックスの人たちや運営メンバーで話す時間を持ちました。それらから、経験やその捉え方、考え方にも多様性がある、「こういう経験をする」とひとくくりにはできないのだと分かりました。会の参加人数は約90人で今までで一番多く、終わった後のアンケートでは、長い感想を書いてくださった人も多く、「初めて聞くことで声の重みや大切さを感じた」や「差別をなくすために私も何ができるか考えていきたい」など、心温かい言葉をたくさんいただき、想いが伝わったことを実感しました。また、今まで家族にも話せなかったなか、今回はスピーカーや運営メンバーの家族や幼いミックスの子をもつ保護者が参加したことも、このイベントを開催した意義を感じました。

自分らしくいられる居場所

本当につらい時期であったからこそ、団結し、差別という人間自身が作り出した問題についてみんなで考え、様々なことがある複雑な社会の中でお互いをサポートすることが一番大事であることを心から感じました。イベント後も多くのアフリカにルーツを持つユースにつながることができ、気軽に話す「オンラインお茶会」を続け、「進路相談」の会も開催を予定しています。今までずっと心の中に抱え込んできた想いがはじめて言語化され、大事な対話の場になっています。

これからも、アフリカンユースミートアップ、アフリカンキッズクラブ、アフリカンキッズクラブ東海は、アフリカにルーツのある子ども、ユースの人たちが自分らしくいられる居場所であるように活動していきます。